野坂昭如
nosaka akiyuki

人称代名詞

kōdansha
bungei bunko

人称代名詞（にんしょうだいめいし）
野坂昭如（のさかあきゆき）
© Akiyuki Nosaka 1988
昭和63年10月10日第一刷発行
発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2・12・21 〒112-01
電話 東京（03）945・1111（大代表）

講談社
文芸文庫

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社
定価540円
Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。
なお、この本の内容についてのお問い合せは
文芸文庫編集室宛にお願いいたします。（庫文）

ISBN4-06-196028-8 (0)

人称代名詞

nosaka akiyuki
野坂昭如

講談社 文芸文庫

目次

人称代名詞　七
著者から読者へ　一九五
解説　秋山駿　二〇〇
作家案内　鈴木貞美　二二三
著書目録　二三五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

人称代名詞

「俺」は小説家、夭折のさだめを永らえて、曲折の綾は、筆先き三寸小手先きの、鶏口になりかねて写す銃後の営み、さては闇市焼跡やけのやんぱち、諸人だまくらかして一炊の夢を焼土にかけめぐらせ、饒舌家、剽窃家、調節家、小説か、雑文か。口ははったり手はばたり持った禿筆とり落し、江湖の人士の寝覚めのよすがはとてものことに、いかに糊口をしのがんかと、思い悩むも芸のうち胸のうちるるとのべるによってかくはいう。

小説を小節におきかえたれば、すなわち「お前」謡人なり、苦節ようようにしてなれば謡といい、ようようと声かけられるを待ちのぞんで謡といい、妖といい、酔うという。ヨーヨーのあやつり、見る眼にやさしくとも、小節関節喉の節年古りてはいとぎくしゃくと、結節の基をきずき、切々の情嫋々の節にはほど遠し、されど月々火水木金々すべてが謡日、おかげで月日の過ぎたるを知らず。

「彼」は被告ならん、ならんと覚束なきいいようは、さっぱり実感を伴わず、われしらず

こきし屁の如くあれば、屁こきがより正しくはあるか。夫れ本来の仏に姿なく、神に形なしという、屁もまたしかり、屁こきもたらすお上もしかり、しかりすかりと抜差して得る法悦もあれば、こちらはしかられてばかり、げにりとられの差は天地雲泥。屁こきの身がまた何をさかしら口とは思えども、持って生れた身の因果、妄を追い夢に足をとられて、何がうつつかうたたねか、われとわが屁こきの音に眼覚めて、書きつづるよしなしごと、そも屁をもたらす大本はなにか、同じ豆を食いて香気充つるもあり、臭気あたりを薙ぎ倒すもあり、五臓六腑にこそ罪咎はあれ。すべては身内のこと、あえて屁こきのひりざま記すははばかり多しとはいえ、当人にすればこれも身のうち、出物腫物得物戯れ物。

不在農夫は「ぼく」なり、奴僕という如く、しもべの訓当てる如く、ぼくはぼく。うんとうなずく二字を加えれば、すなわち暴君、暴君を夢みつつ、運のなければ、ついにぼくどまり、さりとて朴訥にほど遠く、木鐸とは無縁、墨は紙より肌にむしろふさわしからん。ぼくは土地に執着し、米に未練を残し、おぼつかなき足腰に、ぬかるみをかきまわし、泥の深さはかるよりは、穫れだかあさましく胸算用、あげく残陽未だ山の端に明るき頃より、檐端の杉葉めざして一目散。天の恵み地の御恩稔れば垂れる稲穂のめでたきさま、うちながめてふとかえりみれば、ゴオンゴオンと暮合いの鐘に、ぼくの得手吉うなだれてままならず、不在農夫は今やむさい老夫と変じたり。

「あなた」はあなたに在り、あなたに在れば夜目遠目御簾(みす)の内なる亡国の美女なり。あなた想えば御稜威千匹曲取りして、ついへのこなりうれし泣き、竹の園生はますます弥栄え、あなたますます不老長寿、かげになくのは太子か赤子か。一天万乗二重橋、さんざ死なせて護国のろくでなし、七生報国八紘一宇九段に散るは桜紙。大内山の松のみ繁り、まず喰い虫の身は細る、痩せるも細るもあなたのため、なおますますのねずみ泣きは忠忠と、ちはやふる現人神の御前に鈴口ふり立て、しこしこかしことかくはかくいう昭如信士。

俺

体重百八十六ポンドと、司会いや今は行司役の、英文学者の質問に端数まで答えながら、身長については首をひねる、「Nさんは何センチですか」「百七十二」行司、したり気に見較べて、「クラインさんの方が少し高いかな」俺は男性用の、いわゆるハイヒールで

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はないが、踵の高いブーツだし、クラインはパット・ブーン風スニーカーで、裸足になれば十センチ近く違うだろう。「ミスタークラインは南カリフォルニヤ大学で、アメリカンフットボールの同好会に所属し、ポジションはラインバッカー、Nさんはラグビーを現在なさっていて、この点では互角といえましょう」

もう少し頬がこけると、癌性容貌とみなされかねぬ、痩せた英文学者、表情に笑い絶やさず、三百人ほどの聴衆につげる、ステージには白い紐で、歪つな円が描かれ即ち土俵、俺はこれから、この大男と相撲をとらなければならないのだ。

大男、ロバート・クラインは、アメリカの小説家で、これまでに長篇を二冊、戯曲を三篇世に問い、気鋭の作家として嘱望されているという、しかし、これだけでは食えず、大学で古代言語学の教師を勤め、二年前、大きな農場の娘と二度目の結婚をして、以後は、いわば晴耕雨読の生活、四日前、クラインと酒を飲んだ時、その妻と産れたばかりの男の子の写真を見せられたのだが、開拓当時の建築様式を模したとおぼしき木造の家と、大木の前に、頑丈そうな女が赤ん坊を抱いて突ったち、なにやらめでたき建国二百年祭の仮装めいた印象だった。

クラインの名は初耳である。専門家にたずねると、新進作家として紹介されている文章を読んだ覚えはあるが、読んだことはないという。あらかじめアメリカンクラブから、

「シルバームース」「ダークシャングリラ」という、その著書二冊を渡されていたが、どうせ読めやしない。

俺は靴を脱いだ。踵の分だけ寸が詰まれば、パンタロンの裾をひきずるから、あらかじめ膝まで折りかえしておく、靴下も脱いで滑りどめ。足の爪がのびていた、人前で裸足になるのは失礼なことだと、教えられたことを思い出す、ヒッピー以後はどうってことでもあるまい。クラインのいでたちは、ルパシカ風とでもいえばいいか、半天まがいを前で合わせて紐で結び、かなりの長髪だった。

四股を踏んでみせる、聴衆いや見物人といった方がいい、拍手が起る、親指に力を入れ、爪先から踏みおろし、十分に腰を割る。膝に軽くおいた掌がピシッと鳴った。俺は小学校五年から、中学の二年まで相撲の選手だった。

「逃げるなちゅうのが判らんのか」相手を送り出して、うい得意気な俺に、ミナガワの罵声がとぶ、脇を固めもろはず一気に押込まなければいけないのだ。低学年の頃から、相撲、いやとっくみ合いは強かった、一つには父が前田山の後援会に入っていて、よく本場所を観にいき、畳の上の稽古をつけてくれて、うっちゃりは敵のさし手の方へ体をひねるとか、投げを打たれたら、相手の膝に掌を当てるなど、身につかないまでも、頭では心得ていたのだ。

しかし、それよりも、俺の気の弱さがルールのあるとっくみ合いにおもむかせた、およそ友達ができず、クラスの中で俺だけはあだ名がつかない、はっきり自覚していたわけではないが、彼等と自分をへだてる膜の如きものを時に感じ、これをぶち破るには体でぶつかるのがいちばん。かなり窮屈になっていたが、アメリカとの戦争が始まるまでは、ゴムのボールもドッジボールもあった、だが、九歳にしてかけはじめた針金にセルロイドを巻いた眼鏡の、ツルをかばえば、ゲームに加われず、やがてボールがなくなると子供達は体だけが元手の遊びにふけり、同じ理由でこれも駄目、そこから足を出してはいけない線が、地面に描かれているのだが、眼鏡はずすとこれすら見えぬ。

だから体操の時間に砂場で行われる相撲だけが、俺の楽しみだった。四年の時、身長の覚えはないが三十キロ、六年で三十六キロ、中学二年で四十一キロ、まずは痩せた体格で、そのためだけでもないが、もっぱら引き技で勝つ。学級担任の教師が痔を患って入院し、俺はミナガワのクラスに預けられた、五年の時だ。

御影師範の相撲部にいたという赤ら顔のこの教師は、かねがね国技による心身の鍛練を主張し、しかしすでに中学受験をめざす連中の、特に親が、放課後の何時間か、テッポウやらスリアシの稽古にふり向けることを嫌がり、すると高小へ入る連中しか部員を希望せず、これは父兄会の手前具合いわるい。そこへ、いちおう級長を勤め、相撲となると眼の

色かえて張切る子供が自分の組に入って来た。今風にいえば相撲部設立の目玉商品にされたのだ。何といって誘われたか、覚えていない、とにかく五年を最上級生として部を創る、その主将になれといわれ、俺は有頂天で、誰かれなしに声をかけ、すべてに断わられた、「スモウ？　阿呆らしもない」俺に人望のないせいもあるが、いずれも、何を子供っぽいといった感じで、たしかに犬っころの如きとっくみ合いは低学年にこそふさわしい。

俺はくじけず、高小コースの手合い、不思議なことに、喧嘩の強い餓鬼大将は、彼等の中にいるのだが、これも加わらず、朝鮮人、台湾からの移住者が半ばをしめる部員とともに校庭東南の角の奉安殿の対角、西北の隅、便所の前で土俵づくり、土盛りから俵埋めるのまで、いっさい自前だった。番付がつくられて、俺は東の横綱、べつにトーナメントの結果ではない、級長の威光なのだ。

下校時、同じ方向へ帰る生徒が、隊列を組み、奉安殿に最敬礼する姿を横眼に、俺たちは便所のかげで褌をしめる、貧しい連中のパンツは常に汚れていた、そして俺は裏切られる。送り出し、はたき込み、引き落し、うっちゃりがいけない、半身になっての河津掛けも駄目、相撲の基本からいえば、もっともなことだが、金田と名前の変った朝鮮人の辛は、四十五キロあって胸が厚い、いちばん重いのは六十キロ、「ぼくの乳は母さんより大きいねん」掌に受けゆすってみせる、四年の連中もすべて俺よりでかい。

小細工弄さなければとても勝てやしない、はじめはそれほどうるさくなかった、だが、何も手を知らないで入部した連中が、素直にはず押しを覚え、まっこうからぶつかりはじめると、俺の勝率はたちまち下り、つれてミナガワは、口汚なくののしりはじめた、さらに、俺の方は遊びのつもりなのに、みな殺気立って土俵に上り、その気迫に怯えてしまう。

やけになって、いわれるまま突っ込み、だが身についたものはいたしかたない、無意識に引き技が出て、すると相手が怪我をする、がむしゃらに腕ふりまわすうち、頬に当って張り手とみなされ、汚ないといわれる。

俺より弱いと見込んで誘った連中にも、ころころ敗けるようになり、半年後、俺はこれより下はない幕尻に腰をすえ、対校試合には最上級ということで出たが、そしてミナガワは、この時だけ引き技を許したけれど、中途半端になっていて常に腰くだけ。

ラインバッカーとは、いかなるポジションなのか、クラインの、ルパシカまがいで隠しても、なおこんもり盛り上った腹をみれば、スポーツからは、かなり遠去かっているはず、何の準備運動もせず、俺の四股をながめている、リチャード・ウィドマーク風に眉がうすく、気おくれのせいだろう、獰猛な表情にみえる。かなり腹を立てていると思う、一時間半の公開討論では、さんざからかったのだから。「私は、小説を書く場合、常にある

べき人間の姿を描かねばならないと、考えています。苛酷な運命に立ち向ってくじけず、希望を捨てずに努力する人間の姿、誤解を怖れず、自らの信念に殉じて、生命を賭ける人たち」司会者をはさんで、俺とクラインがすわり、ステージ、といっても三十センチほど高いだけの、まずは教壇風そのぎりぎりまで、椅子がおかれ、満員の聴衆だった。

大学英米文学科の教師を通じて、お客を集めたというが、他にアメリカンクラブ友の会風組織があるらしく、その職員と狎れ狎れしげに英語でしゃべる若者も、かなり混じる。俺だって、英米文学者をまるで知らないわけではない、司会者の挨拶の間、丹念にながめわたしたが、顔馴染みは見当らぬ。

ほとんどが英米文学ではなくて、英米語、それも会話の上達をのみ心がけている連中なのだろう。大学のシンポジュウムなどに出席すると、たいてい一人や二人、この手合いが質問してくる。俺の偏見だろうが、たとえばお題目を唱えつづければ、下顎部に脂肪がついて、しもぶくれになる、テナー歌手は、その発声法によって、表情が似てくる、近頃の日本共産党幹部の顔つきに、相似性が強いのは、どういう理由によるのか判らないが、日本人が英会話に熱中し、LとRの正確な発音に人生の目的を定めた場合、彼等の、特に眼が似てくる。

他の国の言葉を流暢にあやつる者が、どうであるか、なにぶん見聞が少くてたしかめら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com